

街を皆で“niji-iro”に その種を届けるニュースレター

にじいろ協働事業通信

2020.3.22

にじのたね Vol. 8

多様な性のあり方を知る【にじのこえ②】

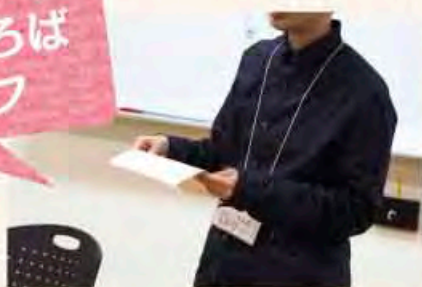
多様な性が教えてくれたこと 「私達はもともと多様な存在」

エル・パーク仙台を会場に月一回開催されてきた「にじのひろば」。2月23日は、「にじのひろば」スタッフしんやさんのライフヒストリーと、にじいろ協働事業リーダーの小浜さんの公開インタビューを行いました。

「にじのたね」最終号の今回は、お二人のお話をお伝えしながら、「にじいろ協働事業が伝えてきた多様な性のあり方とはどんなものだったか」「仙台がにじいろのまちになるためには」について考えます。

にじのひろば
スタッフ

1年間スタッフを務めた
大学生のしんやさん

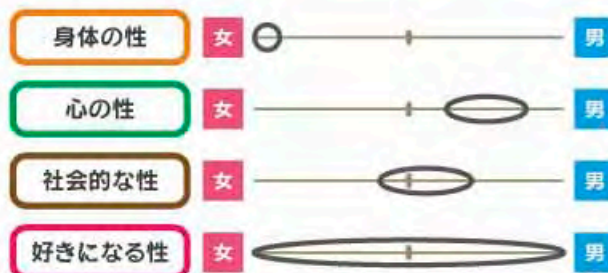


それぞれの性のあり方を話し合えた貴重な場

性的マイノリティの居場所づくりに関わった経験もあるしんやさん。にじいろ協働事業に関わるようになったのは、1年目に「せんだいレインボーDAY」のボランティアとして参加したのが始まりです。2年目はリーダーの小浜さんが声をかけたことがきっかけで「にじのひろば」のスタッフとしても活動し、たくさんの出会いがあったそうです。

「性的マイノリティの仲間とは、自分から動かなければなかなか出会えないという現実があるので、新しい出会いを求めてお受けしました。ありのままに近い自分である場所だと感じられ、自分の居場所になれば良いという期待も叶えられたと思っています。訪れる人それぞれの性について聞くことができ、多くのことを学ばせていただけた大切な場でした。」

2月23日の「にじのひろば」ではご自身のライフヒストリーを披露してくれました。



しんやさんの感じている性のあり方を表したもの。性的マイノリティではない人も、性のあり方をこのグラフを使って表すことができます

しんやさんのライフヒストリー

生まれながらに割り当てられた性別への違和感

自分に割り当てられた性に対して違和感を持ち始めたのは思春期の頃でした。家族の転勤で移動が多かったため、アイデンティティが定まりにくく、はっきりとした時期は今もあいまいです。

感情移入が得意なので、何かにあこがれているだけではないかとか、何か特別なものになりたいと思っているのではないかなど、「思い込みのはずだ」と何度も思い直し、ずっと苦しんでいました。親が用意してくれた服を着ていないと疑問に思われるのではないかと不安で、着たくない服の中から目を閉じて無理に選んで着たりしていました。

周囲に望まれる自分を演じる日々が続き、本当の自分が分からなくなっていきました。徐々に親と一緒にいる空間では過ごせないと感じるようになり、中学卒業を機に親元を離れ全寮制の高校に入ることを決意しました。

毎日の生活を共にする仲間へのカミングアウト

女子寮での暮らしは不便も多く、皆に嘘をついているような気持ちを抱えたまま、親元を離れても自分を演じる生活は続きました。

やっと自分の思いを認めようと決心がついたのは高校2年の終わりごろでした。

中面へ続く

にじいろスピーカー派遣



仙台市の各部局、学校などに講習や研修を提供しました。目標回数は達成できませんでしたが、「学ぶ必要がある」と伝えられたことが成果です。また、興味のなかった人、性的マイノリティの存在を知らなかった人にも伝えることができ、「はじめの一歩」を踏み出して頂けた人が多かったという点でも意義深い活動でした。

確信を持つことができた理由は2つありました。ひとつは「嫌なことは断ればいい」「来たくない服は着なくていい」と気づき、服を捨てたり、髪を切ったりできたこと。無意識だったのですが、そんな普通のこともできなかったと気づきました。もうひとつは、5年以上もの間、寝ても覚めてもその違和感のことはばかり考えていたということ。「朝起きたら変わっていて欲しい」と毎晩願ってきた日々を思い返し、変わりようのない自分の事実を、勇気を出して受け止めることにしたのです。

さらに僕は意を決し、仲間一人一人にカミングアウトするようになっていきました。

「もうわかっていた」「理解できない」など、反応はそれぞれでしたが、「どういうことなの」と質問してくれる人もいて皆それぞれに受け止めてくれました。中でも「分からないけど、しんやはしんや」というのが一番響いた言葉です。

また、カミングアウトして良かったことは、向こうもまたある種のカミングアウトをしてくれたことでした。ある人は自身の悩みを、ある人は自分の思いを、ある人は自身の障害を。一緒に暮らしてきた仲間でしたが、その時僕はその人々と再び出会えたと感じました。

僕らしく生きるために違いを大切にしたい

「俺とお前って共通点がるでないよな」と言ってくれた人がいます。僕はその言葉をとてうれしいと感じました。「そうだね」と言って笑い合えることが嬉しかったのです。同じだね、と言ってつながることも大切です。むしろ社会はそのようなつながりが大多数を占めています。けれど僕は、僕の目の前の人との違いを大切にしたいです。理解できなくても、嫌いであっても受け止めていきたいです。

できることならカミングアウトの必要がない社会が良いと思っているので、僕の体験を通してカミングアウトをすすめるわけではありません。また、男らしくありたいと思っているわけでもありません。僕らしく生きようと思って歩んできてたどり着いたのがこのような道でした。

僕はこれから新しい土地で社会人として働きますが、これからも違いを大切にしながら、今までの時間と人とのつながりを宝に、頑張っていきたいと思っています。

せんだいレインボーday



1年目560名、2年目は800名を超える来場者数、ボランティアも1年目約30名、2年目は約60名が参加し、当事者も当事者以外も、多様な人々がたくさん集まってくれました。また、「男女共同参画せんだいフォーラム」にも2年間参加。シンポジウムと映画上映を行い、こちらにもボランティアが参加してくれました。

にじいろ協働事業 リーダー・小浜さんインタビュー

「多様な性を含めて多様性を認める社会にするためには、ひとつひとつ丁寧にやるのが大切だと改めて感じた2年間でした。来年度からが本当のスタートです。孤立を無くすため、これからもじわじわと広がってほしい。」



震災時に何もできなかった体験が原動力

オオギ:「にじのたね」編集部のオオギです。全く予備知識なくスタートし、理解したと思うとまた自分の中の無意識の偏見に気付くという繰り返しの2年間でした。やっと少し理解を深めることができました。

多様な性のあり方に対して社会の理解が進んでいない中、どのような経緯でにじいろ協働事業立ち上げに至ったかを教えて下さい。

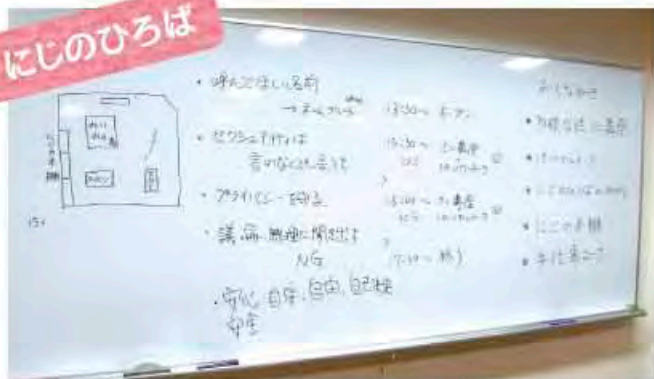
小浜: 性的マイノリティの困難について、当事者の相談に乗ったり自治体に政策提言したりする活動を長年続けていましたが、決定的な原動力となったのは震災時に何もできなかったという体験でした。コミュニティが弱く、被災している仲間がどこにいるのかも分からない、どうやって支え合えるのかも分からない、雲をつかむような状態でした。社会とのつながりが必要と痛感し、教訓を踏まえた取り組みについて行政と考えようと思いました。

2016年の男女共同参画せんだいプランには啓発、教育、相談などについて入れてもらえましたが、仙台市としても具体的にどうしたら良いか悩んでいたという状況でした。そこで、2017年に市民協働事業提案制度に申請。「まずは一緒にやってみよう」というスタートでした。

誰にどう伝え、広がっていくかを想定・設計

オオギ: 4つの事業はどのように設計されたのでしょうか。

にじのひろば



当事者も性的マイノリティについて知りたい人も自由に入りできる場所として、様々な人が訪れました。成果は見えにくいですが、相談につながったり、イベントにボランティアとして参加してもらったり、様々な窓口にもなりました。SNSで見つけてきてくれた人が多く、ファーストコンタクトのためにはなくてはならない場でした。

小浜: 自治体、市民、当事者の3つをつなげるために総合的な事業が必要と考えました。仙台市との「協働」ですが、部署と部署の協働、市民と当事者との協働など、様々な広がりを見込め、皆が集まって自分の地域や活動場所に持ち帰ることができる設計にしました。ボランティアチーム「にじいろキャンパスSENDAI」が中心となり2年間活動しました。(4つの事業は上記を参照)

多様なボランティアのおかげで大きく広がった

小浜: にじいろ協働事業がこんなにも幅広くなったのは、何よりも主体的に関わってくれたボランティアのおかげ。すべてのものを皆と試行錯誤しながら作り上げつつ、任せられることはお任せしました。

オオギ: ボランティアは中高生や大学生、社会人やシニアまで世代も幅広く、本当に多様でした。このように多くの人が関わった理由は何でしょうか。

小浜: それまで行ってきた講演やつながりづくりなど、当事者の地道な活動が当事者だけでなくアライノ^{※1}とつながるきっかけとなりました。1年目はそのつながりで集まった人が多かったのですが、2年目はそれまで会ったことがない方もたくさん関わってくれました。また、仙台市の事業ということで、安心して関わった側面もあったかもしれません。多様であることが前提の場合は意見も出しやすく、皆が当事者意識を持って考えられたことが大きいと思います。

「にじいろキャンパスSENDAI」は、今後も「にじいろCANVAS」として活動を続けることになりました。自分たちで資金を集めて行う活動になることで自由度が増し、より幅広い人との関わりが生まれるかもしれません。

「にじいろスピーカー派遣」や「にじのひろば」など、仙台市として続けて欲しい取り組みもあります。流れが止まることなく続いてくれることを期待しています。

にじいろ協働事業が描く「にじいろのまち仙台」

オオギ: 「多様な性のあり方」が理解されることで、まちは豊かに、伸びやかになっていくと想像しています。

小浜: 性の多様性を前提として集う「にじのひろば」のあり方が、まち全体に広がることが理想だと思っています。

にじのたね



仙台市内の公共施設などに設置し、1年目は主に基礎知識、2年目は当事者やボランティアの声を発信。HPや仙台市のサイトにもPDF版を掲載しました。好評を得て、別冊の制作もすすめています。他にもボランティアがツイッター、インスタグラムで情報発信。多彩な情報が審査会でも高く評価されました。

“異性愛とシスジェンダー^{※2}”は一つのあり方でしかなく、“標準”はない。どんな人も、もともと多様な存在なのだということを一歩ひとりが考えていけるようになりたい。簡単なことではなく、道のりは長いですが、「違って当たり前。だからコミュニケーションしましょう」ということを、あきらめず皆で呼びかけ続けていきたいと感じています。

しんやさんの「ライフヒストリー」でも「自分らしく生きること」について語られていましたが、これは性的マイノリティの方々に限らず誰もが抱える課題です。男らしさ、女らしさは必要か、性的役割分担意識が根深く残る中でその人の特性が発揮できるかなど、「多様な性のあり方」は一人ひとりの問題として考えることができます。

このように、にじいろ協働事業の活動では私達が「当たり前」と感じてきたことを見直す場面がたくさんありました。これまでの常識にとらわれず、「私達はもともと多様であり、一人ひとりに違った思いや意見がある」ということを知り、それを活かすことが「にじいろのまち」に近づく第一歩なのだと思えることができました2年間でした。

公開インタビュー観覧者からの「にじのこえ」

- 何もしない空間で語り合える「にじのひろば」は、意義のある場だと感じました。初めて会った人同士で互いの違う世界が見れることが新鮮でした。
- にじいろ協働事業の中で多くのチャンスを受け、チャレンジができました。「にじのひろば」を通して新しいつながりができたことも嬉しいことでした。
- 「にじのひろば」をきっかけに性的マイノリティの活動に戻ることができました。それまでの自分の経験が役に立つ場面もあり嬉しく感じました。

※1: アライノ/性的マイノリティを理解し、共に行動しようとしていく人たち

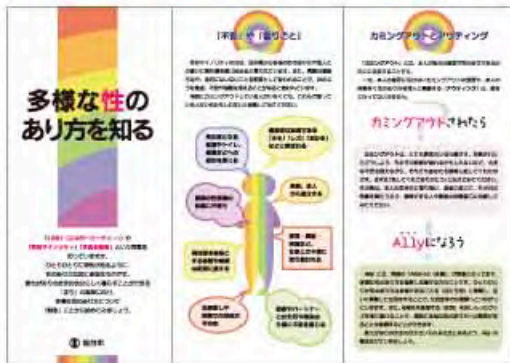
※2: シスジェンダー/生まれたときに診断された身体的性別と自分の性自認が一致し、それに従って生きる人

nijihiro topics

■2020年度は次期「男女共同参画せんだいプラン」策定の年です

2015年度に策定された「男女共同参画せんだいプラン2016」では、「性的指向や性同一性障害等、多様な性のあり方を理由とした社会的偏見や差別をなくすため、理解の促進に取り組むとともに、性的少数者への支援のあり方についても、市民団体等との協働により検討を進めます」と計画され、「にじいろ協働事業」も含めて実現されました。

2020年度に見直され、新たな内容が盛り込まれる次期「男女共同参画せんだいプラン」。意見交換会やパブリックコメントに注目していきましょう！



「多様な性のあり方を知る」ためのリーフレットも2020年1月に作成されました。仙台市のサイトからダウンロードできるほか、市役所本庁舎1階市民のへや、各区役所・総合支所にも配置されています。

■よりそいホットライン

すべての人を「一人にしない」「社会から切り離さない」ことを目指して、24時間通話無料で電話相談に取り組んでいます。電話ガイダンスに従って、相談内容を選べます。

セクシャルマイノリティ
専門回線もあります。
(4番を選択して下さい)
Tel/0120-279-226



■東北HIVコミュニケーションズ

HIV感染症(エイズ)によって、自らの生命や生き方に影響を受けた人々が共に生きる社会をつくることを目的とし、1993年12月に設立。疾病やセクシュアリティなどに刻まれたスティグマ(汚名、恥辱などの意)を克服し、自らの力を回復して、自己決定して人生を歩むことができるよう、様々な集いの開催や相談活動、人材育成を行っています。



エイズ電話相談/022-766-8699
(第2・4土曜日、18~21時)

■みやぎ男女共同参画相談室 / LGBT(性的マイノリティ)相談

男女共同参画相談員によるLGBT相談を実施しています。要望により予約面談も受け付けています。

電話相談/022-211-2570
(毎月第2・4火曜日、12~16時。祝・休日を除く)

編集後記/にじいろ協働事業は、仙台の可能性を広げてくれたと改めて感じました。これからも多様な性のあり方を広め「にじいろのまち」を目指したいですね。(編集部)

●ご意見、ご感想、質問などお寄せください
にじいろキャンパス SENDAI/にじのたね係

多様な性のあり方の理解と課題の可視化について 多様な協働の場を創出する事業 市民協働事業提案制度 ~にじいろ協働事業~

市民の一人ひとりが「多様な性」を自分事としてとらえられることを目的として「にじいろスピーカー派遣」「にじのたね」「にじのひろば」「せんだいレインボーDay」の4つの事業を展開しています。東北HIVコミュニケーションズ、市民有志、仙台市が「にじいろキャンパスSENDAI」を構成して推進します。

- ①にじいろスピーカー派遣
多様な性のあり方についての講座などお手伝いします。
- ②ニュースレター・にじのたね
仙台市の施設などで配布し、市民に広く啓発します。
- ③コミュニティスペース・にじのひろば
仙台市男女共同参画推進センターで来場者とコミュニケーションしながら、情報を紹介したり、必要に応じてサポートを提供します。
- ④啓発イベント・せんだいレインボー Day
多様な性のあり方に触れられるイベントです。

にじいろキャンパスSENDAI (東北HIVコミュニケーションズ、性的マイノリティもそうじゃない人も含む市民有志、仙台市で構成)

事務局 〒983-0836 仙台市宮城野区幸町4-7-2
みやぎのいのちと人権リソースセンター内
東北HIVコミュニケーションズ
TEL/FAX 022-298-8532
[E-MAIL] office@sendai-nijihiro.org
[HP] http://sendai-nijihiro.org



発行 にじいろキャンパスSENDAI
発行日 2020年3月22日
デザイン・編集 トトライティング
発行部数 5000部
配布場所 市内公共施設や行政窓口、市内一部店舗
市内外の男女共同参画センター